

佐渡金銀山発掘調査報告集



佐渡市



佐渡金銀山発掘調査報告集

佐渡市

佐渡金銀山関連遺跡調査地

地図中の①～②①は、右「発掘調査一覧」の各調査地を示す。

佐渡金銀山関連遺跡調査地

地図中の❶～❷❶は、右「発掘調査一覧」の各調査地を示す。



佐渡金銀山関連遺跡発掘調査一覧

No	調査内容と調査地概要	調査地	調査期間	調査面積(㎡)	ページ
①	佐渡奉行所跡発掘調査 — 江戸時代における政治・鉱山経営の拠点 —	佐渡市相川広間町 1番地1ほか	平成6年7月13日～ 平成12年3月31日	18,542	1
②	相川金銀山跡分布調査 — 佐渡最大の金銀山跡 —	佐渡市相川銀山町 1番地1ほか	平成11年11月8日～ 平成15年2月12日 平成22年4月1日～ 平成26年3月27日	625,000	3
③	新穂銀山跡分布調査 — 小佐渡山地の銀山跡 —	佐渡市上新穂・ 北方ほか	平成12年～平成16年 平成21年1月4日～ 平成25年3月31日	7,250,000	5
④	鶴子銀山跡分布調査 — 中・近世の佐渡を代表する銀山跡 —	佐渡市沢根・ 沢根五十里ほか	平成15年2月1日～ 平成19年3月30日	3,130,000	7
⑤	上相川地区分布調査 — 相川金銀山の初期鉱山集落跡 —	佐渡市相川小右衛門町 1番地ほか	平成17年7月8日～ 同11月17日 平成18年6月5日～ 同12月22日	34,900 (発掘調査 面積291)	9
⑥	西三川砂金山跡分布調査 — 佐渡最古の砂金山跡 —	佐渡市西三川ほか	平成19年4月～ 平成24年3月	6,500,000	11
⑦	カジ屋敷遺跡・せりば遺跡発掘調査 — 西三川砂金山の水路跡 —	佐渡市 西三川240番地ほか	平成19年1月16日～ 平成21年3月20日	5,200	13
⑧	佐渡金山遺跡確認調査 — 上町地域のメインストリート(京町通り等) —	佐渡市相川下京町ほか	平成19年11月13日～ 平成23年10月26日	495.7	15
⑨	吹上海岸石切場跡分布調査 — 江戸時代の鉱山臼用石切場跡 —	佐渡市下相川	平成19年11月14日 平成20年8月30日～ 同10月10日	17,800	17
⑩	旧佐渡鉱山工作工場群跡発掘調査 — 明治～昭和期の工場跡 —	佐渡市 相川北沢町2番地ほか	平成20年4月25日～ 平成21年1月30日	1,686	19
⑪	片辺・鹿野浦海岸石切場跡分布調査 — 江戸時代の鉱山臼用石切場跡 —	佐渡市戸中・南片辺	平成20年10月1日 平成21年9月4日～ 平成22年3月19日 平成22年6月10日～ 同6月11日	1,000,000	21
⑫	佐渡金山遺跡発掘調査 — 相川四十物町地点の宅地跡 —	佐渡市 相川四十物町地内	平成21年8月7日～ 同9月27日	54	23
⑬	鶴子代官屋敷跡発掘調査 — 中・近世の銀山代官所跡 —	佐渡市沢根ほか	平成22年7月1日～ 平成25年10月31日	676.7	25
⑭	西三川砂金山跡試掘調査 — 砂金採掘地の1つ五社屋山地区 —	佐渡市大小ほか	平成23年10月14日～ 平成26年12月12日	22.5	27
⑮	鶴子荒町遺跡発掘調査 — 鶴子銀山の鉱山集落跡 —	佐渡市沢根五十里 字牛ヶ首ほか	平成24年5月23日～ 平成25年10月31日	118.5	29
⑯	上寺町地区分布調査 — 近世～近代の寺院跡 —	佐渡市 相川次助町45番地ほか	平成24年8月～ 平成26年1月	50,000	31
⑰	佐渡金山遺跡分布調査 — 中寺町地区の善行寺跡 —	佐渡市相川中寺町	平成25年8月15日～ 同9月30日	4,000	33
⑱	戸地川発電所分布調査 — 大正～昭和時代の佐渡鉱山発電所跡 —	佐渡市戸中ほか	平成26年4月25日～ 平成27年1月15日	2,000	35
⑲	上相川地区分布調査 — 相川金銀山の初期鉱山集落跡 —	佐渡市上相川町ほか	平成27年4月9日～ 平成28年3月31日	10,000 (測量2,600)	37
⑳	西三川砂金山跡発掘調査 — 砂金山の集落(笹川地区) —	佐渡市西三川	平成28年4月18日～ 同12月16日	336 (一部2層調査)	39

佐渡奉行所跡発掘調査

—江戸時代における政治・鉱山経営の拠点—

所在地 佐渡市相川広間町1番地1 ほか

調査期間 平成6年7月13日～平成12年3月31日

調査面積 18,542m²

遺跡の概要

江戸時代、佐渡は金銀山経営のため徳川幕府が一国を管理する直轄領でした。佐渡奉行所は、慶長8（1603）年に佐渡代官の大久保長安により、新たに佐渡の政治・経済の中心とするために建てられたもので、建設当初は、現在の2倍の敷地面積をもち、書院造りの建物や茶室などを備えていたといわれています。

その後、佐渡奉行所の建物は、火災による焼失と再建を5回繰り返し、明治維新後も役所や学校として改築されながら使われました。昭和4（1929）年、国史蹟に指定されましたが、昭和17（1942）年の火災により建物が全焼したことで史蹟指定が解除されました。

平成6（1994）年、「佐渡金山遺跡」の1つとして、再度国史蹟に指定されたのを受け、来訪者によりわかりやすく奉行所を理解してもらうための保存整備事業が開始され、同年より平成10年・12年までの約6年間にわたる発掘調査が実施されました。平成12年度には、発掘調査や絵図・古写真等の資料を基に、安政年間の佐渡奉行所（御役所部分）が復元され、一般公開されています。

奉行所敷地には、役所と裁判所を兼ねていた「御役所」と、その後方には奉行の住む「陣屋」が続き、御役所・陣屋の周辺には御金蔵をはじめ、広間役役宅や武具蔵など関連施設が建てられていました。また、御役所北側の一段低い場所には、寄勝場^{よせせりば}・寄床屋^{よせどこや}（現県道部分・湮滅）といった選鉱・製錬に関係する工場群が付属していたことも大きな特徴です。また、隣接する現在の相川病院付近には、小判製造に関わる後藤役所や組頭の北役宅・南役宅などが置かれていました。



発掘調査時の上空写真

調査の成果

発掘調査範囲は、御役所・陣屋・役宅・御金蔵などが設けられた南側上段と、寄勝場^{よせせりば}と呼ばれる選鉱作業を行う工場が設けられていた北側下段を中心とする範囲で、斜面地を除く佐渡奉行所跡のほぼ全域に及びます。

検出された遺構のうち、南側上段では御役所の礎石や石畳・大御門等の建物跡、武具蔵、井戸跡といった奉行所施設に関わる建物の遺構のほか、敷地南西端で長竈・丸竈・中仕切竈といった製錬炉跡群、御金蔵跡北側で鉛板が埋納された鉛土坑を検出しました。北側下段では旧相川中学校建設に伴って建築された基礎により、遺構が湮滅している範囲が見られましたが、寄勝場の柱穴や井戸跡、排水路等の遺構を検出したほか、勝場で使用された船^{ふね}と呼ばれる木製の水槽 26 基を検出しました。



製錬炉群（西から）



役所前雨落遺構（北から）

出土品

出土遺物は、肥前系陶磁器・中国産陶磁器・瀬戸美濃焼・備前焼・信楽焼・京焼・越中瀬戸焼等の江戸時代の陶磁器類のほか、鉛板等の金属製品、荷札木簡や船等の木製品、鉾山臼^{たたいし}・扣石等の石製品が出土しました。また、製錬炉群周辺では、焼金法等の製錬の際に使用されたと考えられる棒状土製品・盤状土製品・板状土製品等が出土したほか、鉛土坑からは重さ約 41kg の鉛板 172 枚が出土しました。

このうち、陶磁器類は 17 世紀前半のものが質量ともに充実していることが判明しており、その理由として、相川金銀山の好景気に連動しているのではないかと考えられます。

平成 23 年 6 月、佐渡奉行所跡より出土した遺物のうち、928 点が国重要文化財に指定されました。



佐渡奉行所跡出土品（重要文化財）

Photo by T. Ogawa

まとめ

これまでの発掘調査によって、金の製錬に使用された長竈をはじめとする製錬用の炉跡群、鉾山の製錬に使用された鉛板など、貴重な遺構や遺物が多く発見され、相川金銀山と共に江戸時代における政治・経済の中心であった佐渡奉行所の全容の一端が明らかになりました。

（宇佐美 亮）

相川金銀山跡分布調査

— 佐渡最大の金銀山跡 —

所在地 佐渡市相川銀山町1番地1 ほか
調査期間 平成11年11月8日～平成15年2月12日
平成22年4月1日～平成26年3月27日
調査面積 6,250,000m²

遺跡の概要

相川金銀山跡は、大佐渡山脈の低山地、標高約70～360m付近に立地する鉱山跡です。遺跡の南部には右沢が流れ、青盤脈と呼ばれる鉱脈を挟んで北側には中尾沢等の支流をもつ左沢（濁川）が流れます。さらに遺跡の北部には相川湾へ流入する水金沢が流れ、これらの沢や周辺の斜面に採掘遺構が分布しています。

相川金銀山は、慶長元（1596）年に鉱脈が発見されて以来、佐渡島を代表する金銀山として開発が進められ、江戸時代には約300ヵ所の間歩があったと伝えられています。明治時代には全国で2番目に早く官営鉱山として明治政府によって近代化が進められ、国内の「模範鉱山」としての地位を確立しました。明治27（1896）年、三菱合資会社に払い下げられると、平成元（1989）年に休山するまでの間、三菱系の鉱山として稼働しました。休山するまでの約400年間にわたる金銀生産量は、金78t、銀2,330tとされ、徳川幕府や政府の財政に大きな影響を与えました。

現在、道遊の割戸や宗太夫間歩、近代遺跡（大立地区・高任地区・間ノ山地区）のほか、父の割戸、大切山間歩等を擁する相川金銀山跡の鉱床地域が国史跡「佐渡金銀山遺跡」に追加指定されています。



相川金銀山遠景（西から）

調査の成果

平成11年度から平成14年度にかけて相川町教育委員会により、保存を目的とした遺跡範囲を確認するため、約6.25km²の範囲にわたって分布調査を実施しました。この際に確認された遺構は、露頭掘り跡45基、近代坑を含む間歩跡113基、大山祇神社跡1ヵ所、石積み遺構1基、上相川火薬庫1ヵ所でした。また、平成22～25年度には、相川金銀山に関わる文献・絵図等の資料調査や松江工業高等専門学校の協力により、大切山坑や南沢疎水道等の坑内探査を実施しました。



道遊の割戸遠景（南西から）



江戸時代に描かれた相川金銀山の平面図（「銀山岡絵図」）



江戸時代に掘削された坑道



父の割戸

まとめ

相川金銀山は現存する各時代の採掘跡や近代以降の鉱山施設だけでなく、関連する資料類が豊富に残されていることも特徴の1つです。これまでに行われた分布調査や資料調査を通して、江戸時代の文献資料・絵図・現地遺構（現存していないものもあり）をそれぞれ対比させることで、同時代の相川金銀山全体の採掘域の変遷や主要な間歩の採掘期間を明らかにすることができました。しかし、相川金銀山は、江戸時代初期の資料が少ない時期の様相や、鉱山の近代化が図られた明治時代以降についての検討といった課題が多く残されていることも事実です。今回の調査成果をベースとしつつ、今後も引き続き調査を継続すると共に、関連遺跡の発掘調査といった更なる調査や研究を通して、相川金銀山の全容に迫っていきたいと考えています。

（宇佐美 亮）

新穂銀山跡分布調査

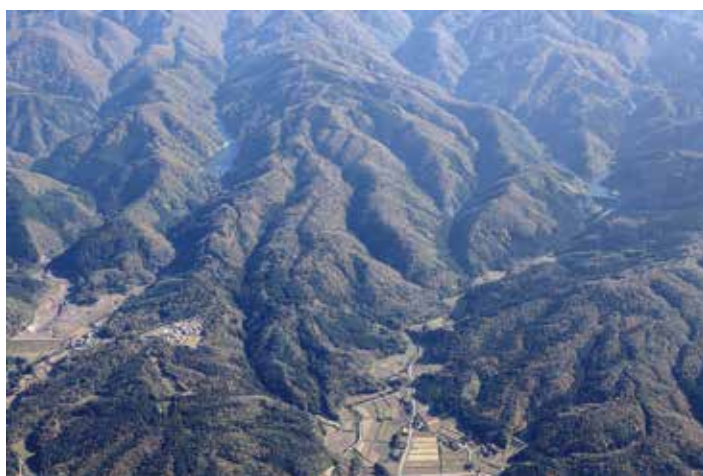
— 小佐渡山地の銀山跡 —

所在地 佐渡市上新穂・北方 ほか
調査期間 平成12年～平成16年
平成21年1月4日～平成25年3月31日
調査面積 7,250,000m²

遺跡の概要

新穂^{にいぼ}銀山跡は、佐渡島の東部、国府川流域（天神股川）から大野川流域（大野川・右沢・左沢・蛭河内沢など）にまたがる標高約100～400m付近の山中に所在します。

銀山の開発がいつ頃から始まったのかは定かではありませんが、16世紀に開発された鶴子^{つるし}銀山と同様の名称を持つ「百枚間歩」の存在や、天正10（1582）年に鉱山とかわりの深い寺院が移転していることから、遅くとも16世紀後半には開発が始まっていたと考えられます。別名滝沢銀山とも呼ばれ、17世紀前半には「滝沢千軒」といわれる繁栄期を迎え、その後急速に衰退し、昭和18（1943）年の三菱による探鉱を最後に閉山しています。



新穂銀山跡遠景（中央の山地部分が銀山・北西から）

調査の成果

新穂銀山跡の調査は、平成12～16年度に新穂村教育委員会、平成21～25年度には佐渡市が中心となり、銀山とその周辺の約7,250,000m²の範囲を調査対象として実施しました。主な調査として、現地にて遺構の分布状況を調査する分布調査と、関係する文献や絵図等の記録類を調査する資料調査があげられます。

分布調査によって確認された遺構は、銀鉱脈を採掘した露頭掘り跡991基や坑道掘り跡15基といった銀山の採掘遺構のほか、北方山城跡に伴う土塁や郭跡、石組み遺構やテラス状の平坦地等です。

特に露頭掘り跡は幅2～5m前後の大きさのものが尾根付近を中心に広範囲に多く分布していたほか、「新穂村瀧澤沢銀山岡山図」に「七ツ敷」（楕円形の露頭掘りが直線状に複数基並ぶもの）として描かれた露頭掘りが、現在も現地に残されていることを確認しました。

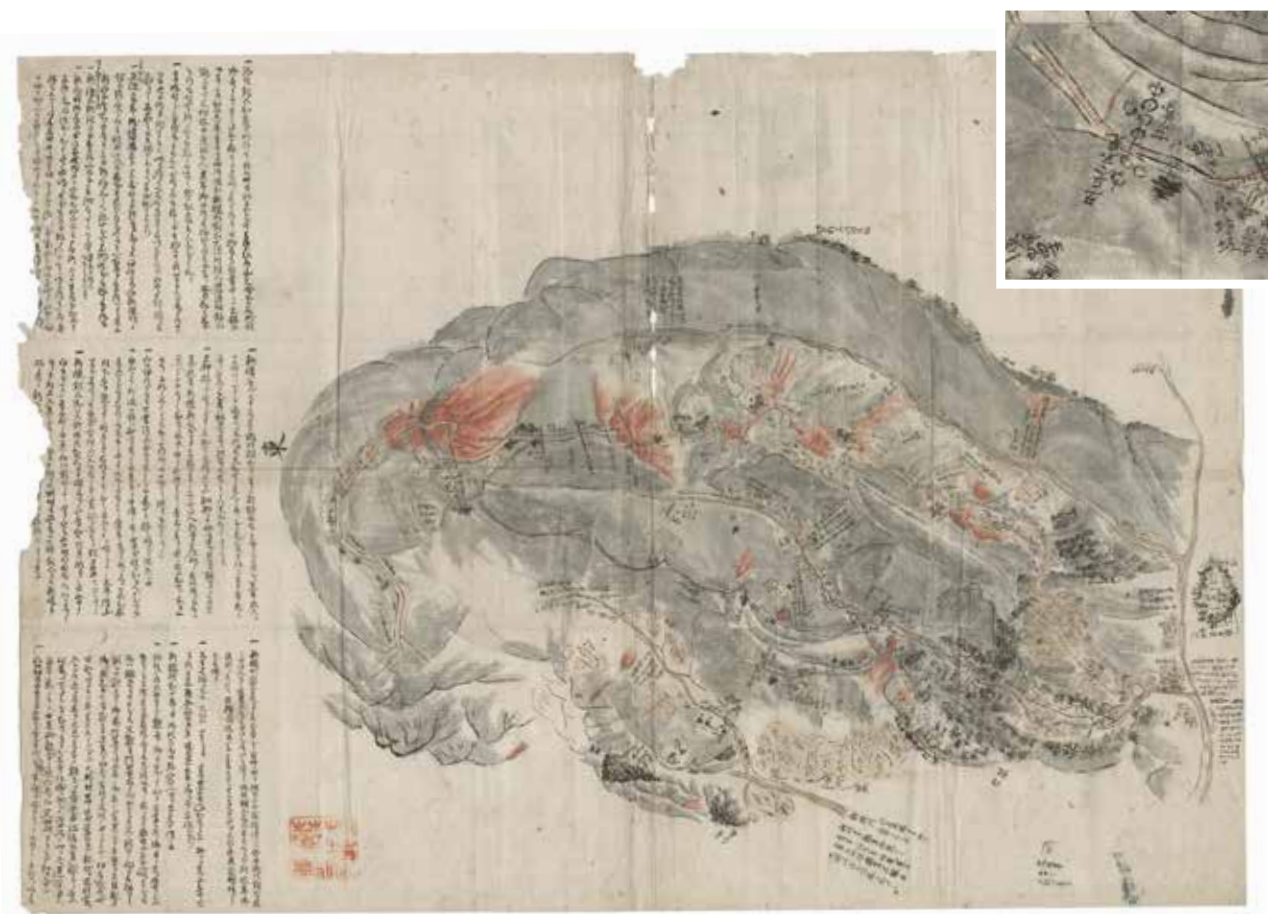
間歩跡絵図によると45ヵ所の間歩名が確認できますが、埋没してしまったものが多く、実際の分布調査で確認できたものは15基でした。このうち、遺構が良好に残されている百枚間歩では、松江工業高等専門学校の久間教授によって坑内探査が実施され、江戸時代の坑内絵図に描かれた坑道の形状がほぼ同じ状態で残されていることが判明しました。



百軒間歩跡（南西から）



セツ敷の残る露頭掘り跡



安政6(1859)年に描かれた「新穂村瀧澤銀山岡山図」とセツ敷（拡大・右上）

まとめ

相川金銀山に比べ記録や絵図が少ない新穂銀山は、資料類から鉱山の全容を推測することが難しい鉱山の1つです。とはいえ、これまで行われてきた分布調査によって、露頭掘り跡が極めて多く確認され、逆に地下にトンネルを掘って鉱脈を採掘する坑道掘りが少ないことが判明しました。これによって、風化が進み粘土化した比較的やわらかい鉱脈を狙って、地表面に近い銀鉱脈を採掘する露頭掘りを主体とした採鉱作業が盛んに行われていたと推測されます。また、江戸時代前半の最盛期以降、再開発があまり行われなかったことで、江戸時代当時の採掘遺構が、当時のままの姿で多く残されていることがわかりました。

（宇佐美 亮）

鶴子銀山跡分布調査

— 中・近世の佐渡を代表する銀山跡 —

所在地 佐渡市沢根・沢根五十里 ほか

調査期間 平成15年2月1日～平成19年3月30日

調査面積 3,130,000㎡

遺跡の概要

鶴子^{つるし}銀山跡は、相川金銀山跡の約1.2km南方、大佐渡山地丘陵部の標高約50～420m付近に立地する銀銅鉱山の遺跡です。現在、国史跡に指定されており、鉱山跡のほかに代官所跡と推測されている鶴子銀山代官屋敷跡や鉱山集落があった鶴子荒町遺跡が含まれています。

天文11（1542）年に発見されたと伝わる鶴子銀山は、以後、佐渡の重要な銀山と位置付けられ、天正17（1589）年には、佐渡を領有した上杉景勝が代官を派遣しています。その後、江戸時代から閉山する昭和21（1946）年まで、徳川幕府・明治政府・三菱が管轄する鉱山として稼働しました。



鶴子銀山跡遠景（中央の山地部分が銀山・南東から）

調査の成果

鶴子銀山跡の調査は、現地にて遺構の分布状況を調査する分布調査と、関係する文献や絵図等の記録類を調査する資料調査を実施しています。安土桃山時代以前の絵図や記録は少ないものの、江戸時代以降は資料も増加し、鶴子沢の重一郎・外山茂^{とやま}右衛門・天童・鶴子・馳割・百枚など、屏風沢の天津市右衛門・庄右衛門・藤兵衛・弥十郎など、仕出喜沢の仕出喜など、大滝の大滝・弥喜知などの82ヵ所におよぶ間歩名があったことが判明しました。調査区の設定は、分布調査に先立って収集したこれらの資料類の情報を参考にして、銀山周辺部を含めた約3,130,000㎡とし、現地で確認した遺構は、個別にGPSによって位置情報を取得したうえで、遺構の記録化を行いました。

分布調査によって発見された遺構は、間歩跡108基、ひ追い掘り跡4基、露頭掘り跡556基、試掘坑跡7基、テラス状遺構（テラス群含む）9基、石組み遺構4基、近代化遺産4基、石造物1基、性格不明遺構1基でした。



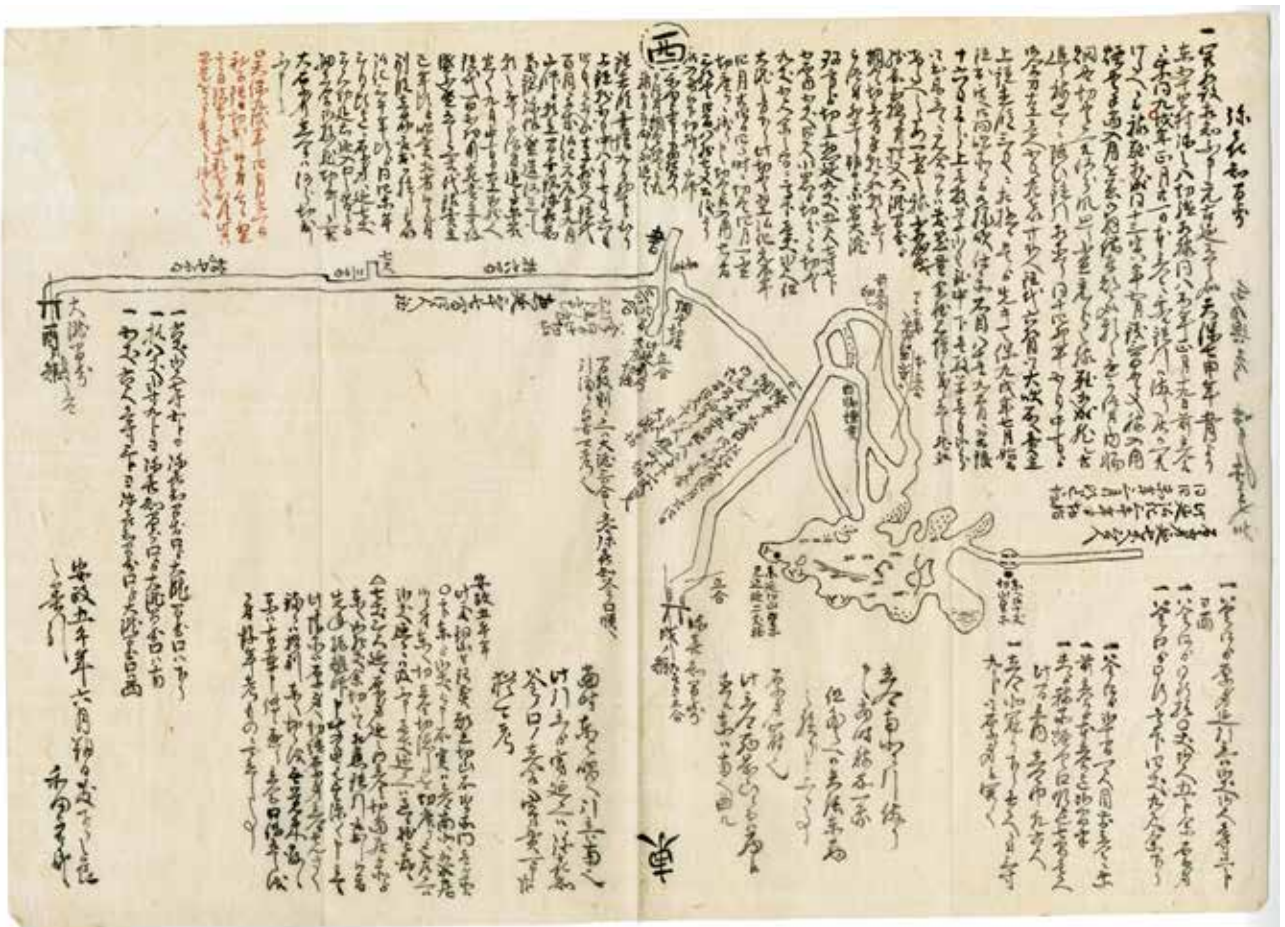
大滝間歩（東から）



露頭掘り跡の様子（東から）



古写真：大正時代の鶴子坑



安政 5 (1858) 年に描かれた「弥喜知間歩」絵図 坑道の形状と開発経緯が書かれている

まとめ

昭和 21 年の閉山より数十年が経過し、詳細な鉱山の範囲や内容が知られていなかった鶴子銀山跡ですが、今回の調査によって鉱山の全容が判明しました。特に地表面の鉱脈を採掘した露頭掘り跡と地中の鉱脈を採掘した坑道掘り跡の立地状況、現存する資料類の検討から、銀山を稼ぐ当時の人々がどのように銀鉱石を採掘していったのかといった開発の変遷が明らかとなりました。

(宇佐美 亮)

上相川地区分布調査

— 相川金銀山の初期鉱山集落跡 —

所在地 佐渡市相川小右衛門町1番地 ほか
調査期間 平成17年7月8日～同11月17日
平成18年6月5日～同12月22日
調査面積 34,900(発掘調査面積291) m²

遺跡の概要

佐渡金山遺跡の上相川地区は、鉱山で働く人々が暮らした鉱山集落の跡です。遺跡は濁川左岸の標高150～250 mの高位段丘上や台地上及びそれらの斜面に立地しており、東西約800 m、南北約300 m、面積は約20haに及びます。周囲には右沢・丹波沢・桐の木沢などの沢が流れ、道遊の割戸をはじめとした相川金銀山の鉱石採掘地に隣接する場所に立地します。相川金銀山の発見と共に人々が集住し、かつては「上相川千軒」と呼ばれる最盛期を迎えましたが、その後、鉱山の衰退と共に人口が減少し、現在は無人の遺跡となっています。



上相川地区遠景（写真中央・西から）



江戸時代に描かれた上相川絵図

調査の成果

平成17～18年度に調査を実施した範囲は、かつて本町・小右衛門町・九郎左衛門町・九郎左衛門裏町・弥左衛門町・番屋町と呼ばれた町があった場所で、現在は山林や荒地となっています。調査に先立ち下草を

全て伐採したところ、旧道や斜面を造成した平坦地（テラス）、石垣、石段等の当時の町並みを示す遺構を次々と確認しました。また、今回の調査範囲外においても大山祇神社や寺院跡等を確認しました。

平成 17 年度に実施した調査では、テラス 37 基、石垣 55 基、石段 1 基を確認しました。また、調査区の一部で実施されたトレンチによる発掘調査では、石垣 3 基、道跡 1 条、土坑 10 基、ピット 20 基、炉跡 1 基等を検出しました。平成 18 年度調査区では、テラス 118 基、石垣 103 基、石段 2 基、道跡 7 条、水路跡 1 条を検出しました。



上相川に残る平坦面と石垣



発掘調査によって検出された炉跡

出土品

上相川地区は、地表面において多くの遺物が散布されている状況にあり、表面採集においても多種多様な遺物を採集しました。また、鉾山集落であったことを物語るように、鉾山臼や扣石等の鉾石を砕くために使用された石製品やズリと呼ばれる砕かれた鉾石が多く見つかりました。

平成 17 年度の調査では、16 世紀末から 17 世紀までの肥前系陶磁器、中国産磁器、瀬戸美濃系陶器等の碗・皿・すり鉢といった陶磁器や灯明皿等の土器が多く出土したほか、鉾石の粉碎に使用した鉾山臼・扣石 165 点を含む石製品 172 点や煙管・和釘等の金属製品 32 点、寛永通宝・雁首銭などの銭貨 22 枚、羽口・五徳等の土製品 13 点、鉾滓 143 点が出土しました。

平成 18 年度の調査は、発掘調査を実施していませんが、16 世紀末～17 世紀を中心とした碗・皿等の陶磁器、灯明皿等の土器、472 点の鉾山臼・扣石などの石製品、寛永通宝 1 点、鉾滓 117 点等を地表面で採集しました。

まとめ

今回の調査の結果から、本遺跡には江戸時代を中心とするテラスや道路跡、水路跡等の遺構、当時使用された石製品・土器・陶磁器類が数多く残されていることが判明しました。また、遺跡に係る絵図や文献等の資料も多く残り、これらの絵図と現在の道路跡の多くが重なることから、江戸時代の道路法線が今も現存していることが判明しました。こうした保存状態のよい遺構が広大な範囲に残っている鉾山集落の跡は、全国的にみても類例が少なく、鉾山で働く人々の生活の一端を解明していくうえで、非常に貴重な遺跡であるといえます。今後、本遺跡の詳しい様相については、さらなる追加調査をとおして明らかにしていきたいと考えています。

(宇佐美 亮)

西三川砂金山跡分布調査

— 佐渡最古の砂金山跡 —

所在地 佐渡市西三川 ほか

調査期間 平成19年4月～平成24年3月

調査面積 6,500,000㎡

遺跡の概要

西三川砂金山は、佐渡最古の金山として知られており、平安時代の『今昔物語集』に載る佐渡の産金の舞台とされています。本格的に砂金採取が始まるのは寛正年中（1460～66）からですが、以後明治5年まで砂金採取が行われました。

これまで、主に文献資料による調査が進められてきましたが、実際の遺跡範囲や現状等については、一部発掘調査が行われたのみで、その全容は明らかにはなっていませんでした。

そこで、佐渡金銀山の世界文化遺産登録の機運が高まるなか、佐渡市では、西三川砂金山の国史跡登録に向けての範囲・内容確認のための分布調査を行いました。



遺跡全景（南西から）

調査の成果

今回の調査では、江戸時代から明治時代初期の遺構と想定される水路跡 10 条、堤跡 10 基、石組み遺構 3 基を確認しました。

このうち、水路跡 8 条、堤跡 9 基については、近世の絵図資料とほぼ一致する場所に存在することが判明しましたが、その多くは、砂金山閉山後に農業用水路や農地などに転用されており、一部、土砂災害や道路改良等で消失している箇所も見受けられました。



水路跡（金山江）



杉平山堤跡

水路跡は、砂金山の上流に位置する5河川を水源としており、斜面を切土した幅1～1.5 m程の平坦面に水路を築いている状況が確認されました。

砂金採取地の標高から逆算して水源を特定し、水が流れる勾配を計算して造成されており、相川金銀山の坑道内の湧水処理のために築かれた排水坑道と同様に、山師たちによって、当時の最先端の測量・掘削技術が導入されたと考えられます。



農業用水路への転用（筑後江）



18世紀後半頃の砂金山絵図（「西三川砂金山全図」上）と現在の遺跡範囲図（下）
（個人蔵）

まとめ

西三川砂金山の特徴は、大きく3つの遺構がセットになっていることです。①水源から導水する「江道」、②水を溜める「堤」、③「採掘跡」に係る遺構群（掘り崩された急斜面や採掘による窪地、採掘場所に縦横に設けられた水路、採掘によって掘り出されたガラ石、鍛冶小屋等に利用された石組遺構）。

今回の分布調査により、西三川砂金山の範囲や遺構の残存状況等が明らかとなりました。今後は、遺跡の保存管理や、公開活用に向けた散策路の整備等が大きな課題です。（若林 篤男）

カジ屋敷遺跡・せりば遺跡 発掘調査

— 西三川砂金山の水路跡 —

所在地 佐渡市西三川240番地 ほか

調査期間 平成19年1月16日～平成21年3月20日

調査面積 5,200㎡

遺跡の概要

遺跡は真野湾から内陸に約4kmの小佐渡丘陵、立残山に隣接した標高約130mに位置しています。

平成5年に、笹川集落の中央を縦断する県道静平・西三川線の改良工事が計画されましたが、事業予定地内には、カジ屋敷遺跡、せりば遺跡、鉄砲場遺跡、砂金江道跡といった西三川砂金山関連遺跡が分布していることから、平成11年に工事着工前の事前確認調査を行いました。その結果、砂金採掘時に撤去したガラ石の堆積が確認され、今回の本発掘調査実施に至ったものです。

また、周辺には、大山祇神社、金山役宅跡、金子勘三郎家等、砂金山関連の施設も所在します。



遺跡全景（北西から）

調査の成果

今回の調査では、平成13～14年度にかけて実施された第一次・第二次調査で検出された石組み水路の延長部分と考えられる水路跡を確認しました。

また、水路跡の北側では、砂金採掘当時の鍛冶小屋跡の可能性のある石組み遺構1基を発見し、調査区北西部のせりば遺跡範囲内では、立残山操業時のものと思われるガラ石の堆積を検出しました。



水路跡



せりば遺跡のガラ石堆積状況

西三川砂金山では、「大流し」と呼ばれる砂金採取技法が用いられました。これは、谷間の地表や山裾を大規模に掘り崩し、砂金を含んだ土石を谷川に滑らせ、上流から長距離水路を設けて大量の水を堤に溜め込み、堤の水を一気に流し込んで余分な土石を洗い流し、流れずに残った比重の重い砂金を集めるというものです。

その工程を描いた絵巻資料も現存しており、今回の調査区である立残山の眼前でも、同様の作業が行われていたと想定されます。



石組遺構



18 世紀後半頃の砂金山絵図（「佐州金銀山全図」）（上）と現在の立残山付近（下）
（新潟県立歴史博物館蔵）

まとめ

今回の調査で、立残山の山裾を走る砂金採取用の水路跡の存在が明らかとなりました。このほか、周辺には、大流しに用いる水を溜めた堤跡や関連する石組み遺構、大量の土砂を掘り崩すことにより堆積したガラ石などが良好に残されており、一連の砂金採取システムを解明する上でも、重要な成果といえます。

（若林 篤男）

佐渡金山遺跡確認調査

— 上町地区のメインストリート(京町通り等) —

所在地 佐渡市相川下京町 ほか

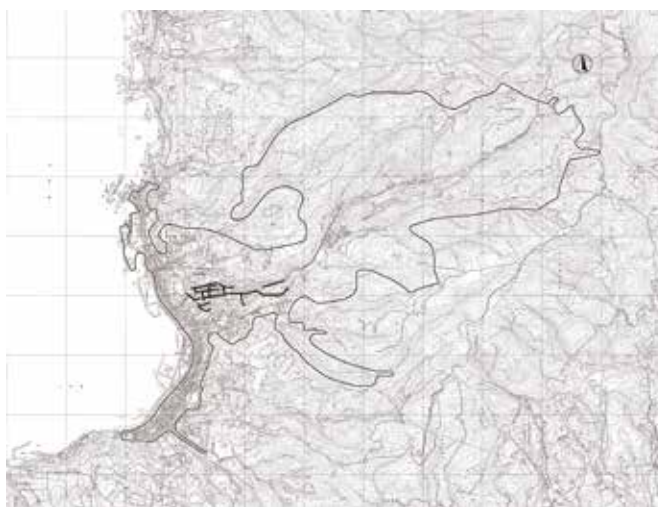
調査期間 平成19年11月13日～平成23年10月26日

調査面積 495.7㎡

遺跡の概要

佐渡金山遺跡は、北方の間歩分布域や「山の内」と呼ばれる上相川・間ノ山のある初期鉱山集落域から、近世初期に市街地化された「上町」^{かみまち}の台地、海岸部の低地に沿って南北に延びる「下町」^{したまち}地域に分布しています。

調査地点は「上町」台地に立地し、奉行所から初期鉱山集落跡の上相川地区へ続く「京町通り」と呼ばれる主要小路や、かつて「藤沢小路」と呼ばれた通り、県道白雲台・乙羽池・相川線内などに位置し、水道工事に伴う確認調査を行い、江戸時代の陶磁器と共に石垣や井戸等が見つかりました。



佐渡金山遺跡の範囲と調査地点

調査の成果

かつて「藤沢小路」と呼ばれた相川下京町～相川米屋町の通りからは、現道下より石垣2基、井戸2基を検出しました。1号井戸は鉱山からの再用品と推定されるトロッコレールを鉄筋の代わりにしたコンクリートで蓋をされていました。

相川下京町～相川大工町間の「京町通り」からは、現道下のいたるところで石垣を検出しました。調査地点北側の石垣に付随したところからは、柱の上部を窪ませ、そこに板を組み合わせたものが見られ、調査地点南側からもほぼ平行する位置から同様のものを検出しました。



2号石垣全景（西から）



1号井戸検出状況（北東から）

県道白雲台・乙羽池・相川線内の国史跡「佐渡金銀山遺跡」の一部である「諏訪隧道」と「神明トンネル」の間に位置する相川大工町の調査地点からは、コンクリート構造物を検出しました。またコンクリート上には、細長い直線状の錆跡や窪みを確認しました。



石垣・木柱・板検出状況（南から）



コンクリート構造物検出状況（北から）

出土品

近世陶磁器のほか、土器、石製品（石磨・扣石・間知石）、金属製品（把手・トロッコレール）があります。陶磁器類は16世紀末・17世紀初頭～幕末期までまんべんなく見られますが、18世紀後半～幕末期の資料が比較的多く出土しています。陶磁器類の産地を見ると、肥前、越前、備前、瀬戸・美濃、志野、中国（漳州窯）などのものが出土しており、当時から、さまざまな地域のものが相川へ流通していたことがわかりました。地元産のものとしては金太郎焼も出土しています。



石磨（左から上面・側面・下面）

扣石

まとめ

「京町通り」や「藤沢小路」と呼ばれた現道下より出土した石垣により、江戸期の小路が近代以降に道路拡幅されたことが確認され、かつての道幅は現在よりも狭小であったことがわかりました。京町通りの調査地点から検出した板と柱を組み合わせた遺構は、番所の木戸や土留などの用途が推定されます。県道白雲台・乙羽池・相川線内で検出したコンクリート構造物は、「諏訪隧道」と「神明トンネル」間に位置する関係から、高任・間ノ山地区で破碎された鉾石を北沢地区の選鉾・製錬施設へ送る旧佐渡鉾山のトロッコ軌道の一部であり、コンクリート上の細長い直線状の錆跡や窪みは、トロッコレールを外した痕跡と推定されます。

（鹿取 渉）

吹上海岸石切場跡分布調査

— 江戸時代の鉱山臼用石切場跡 —

所在地 佐渡市下相川 ほか
調査期間 平成19年11月14日
平成20年8月30日～同10月10日
調査面積 17,800㎡

遺跡の概要

遺跡は、相川市街地の北方、下相川地内の海岸段丘崖下の吹上浦^{ふきあげうら}と呼ばれる海岸、標高0～20 m付近に立地しており、国名勝である「佐渡海府海岸」^{さどかいふかいがん}の指定範囲に含まれています。海岸は流紋岩を主体とする火成岩によって形成され、とくに同地で見られるものは、球顆^{きゅうか}（溶岩に含まれる気泡内に石英が結晶化したもの）の発達した球顆流紋岩が多いことに特徴があります。

石切場における採石の開始年代は明らかになっていませんが、慶長年間に播磨出身の石工が来島し、活動を始めていることから、江戸時代初期には同地で採石が行われていた可能性があります。

また、同地で採石された石材は、近世の相川金銀山で使用された鉱山臼^{うわうす}（上磨）の石材として使用され、現在でも相川の遺跡や町並みの中で、鉱山臼を見ることができます。



遺跡遠景（I区・北から）



金銀山絵巻に描かれた鉱山臼による粉成作業の様子（左）と鉱山臼・上磨（右）

調査の成果

調査区は、標高0～20 m付近の海岸線にある露岸や岩礁部です。遺構が検出された範囲は、吹上海岸の南北2ヵ所（Ⅰ・Ⅱ区）に分かれています。確認された遺構は、石材の切出しが行われた採石域23ヵ所、矢穴・矢穴痕206ヵ所、のみ跡14ヵ所、刻印1ヵ所でした。調査によって、江戸時代から近代にかけての採石遺構を確認しました。江戸時代の採石遺構には、くさびを打ち込むための矢穴・矢穴痕やのみ跡があり、遺跡のほぼ全域に分布していることが判明しました。



石材を切り出した採石域（北から）



のみ跡の残る採石域（東から）



石材を切り出すための矢穴



波打ち際に残る石材を切り出すための矢穴

まとめ

南北2ヵ所の石切場のうち、遺構が多く見つかっているのは南側（Ⅰ区）の石切場で、矢穴口長辺の法量比較と遺構数から、江戸時代前期～中期にかけて採石作業が盛んに行われ、以降急速に衰退していったことが明らかとなりました。これは相川金銀山の金銀産出量に連動していると推測され、鉱山の景気に鉱山臼の生産量が関係していることがわかりました。また、波打ち際の作業が困難な場所に掘られた矢穴は、鉱山臼に適したよりよい石材を求めて、海岸の様々な場所で採石が続けられていたことを物語っています。

（宇佐美 亮）

旧佐渡鉱山工作工場群 発掘調査

— 明治～昭和期の工場跡 —

所在地 佐渡市相川北沢町2番地 ほか
調査期間 平成20年4月25日～平成21年1月30日
調査面積 1,686㎡

遺跡の概要

旧佐渡鉱山工作工場群跡は、相川湾に注ぐ濁川（北沢）右岸下流域に立地しています。調査地点付近は、江戸時代に北沢町と呼ばれ、鉱石を買って製錬する専門業者（買石）が鉱石の粉成をするために居住していた地域でしたが、明治以降に進められた佐渡鉱山の近代化によって、大きく様変わりをした地域でもあり、旧北沢青化・浮選鉱所、北沢浮遊選鉱場、北沢火力発電所発電機室棟、50 mシッケナー等、旧佐渡鉱山近代化遺産建造物群が集中しています。

調査地点は、明治初頭から昭和27年にかけて、選鉱・製錬施設や、選鉱場・鉱山等で使用する機械の部品を製造した工作工場群が建設され、稼動していた場所であり、海岸から600 mほど内陸に位置し、標高は約20 mを測ります。史跡公園整備事業に伴う発掘調査によって、建物の壁や柱、床、キューポラ跡等、様々なコンクリート製の構造物が見つかりました。これらの構造物は、鍛造工場、仕上工場といった、おもに昭和初期～昭和17年頃までに新設・改築された旧佐渡鉱山の工作工場群の施設跡であることがわかりました。



遺跡遠景（南から）

調査の成果

確認された遺構としては、製材及び雑作業場の建物壁面・コンクリート製の基礎、木工工場のコンクリート製の壁面・土間床、木型工場の礎石、鑄造工場（鑄物工場）の建物柱列・ピット・キューポラ・レンガ敷きの工場床、鍛造工場のコンクリート製の壁面・土間床、仕上工場のコンクリート製の建物の床・壁面等があります。各工場間には通路が設けられており、排水路を設置している工場も見られました。検出遺構はコ



鑄造工場の北側通路跡（西から）



製材及び雑作業場跡（南西から）

ンクリート造りの建物が多く、部分的にレンガの敷かれている場所もあり、製材及び雑作業場や仕上工場では、コンクリートの床面下に間層を挟み、レンガ敷きの床面というような時間差をうかがわせる遺構も見られました。



鑄造工場ピット跡（西から）



仕上工場跡（上から）

出土品

発掘調査出土品 工作工場群が建設・稼働した明治～昭和期のものは少なく、主に江戸時代の陶磁器、石磨、扣石が少量出土しています。いずれも工場群のあった時期に帰属するものではなく、工場建設以前のものか、工場廃止後の埋土に混入したものと推定されます。明治～昭和期のものとしては、煉瓦片、機械類の部品と考えられる金属製品等が出土しています。また木型工場と鑄造工場跡の境に位置する杵置場付近からは、円盤形の土製品が出土しました。円盤形の土製品は用途不明ですが、木型に関連するものかもしれません。

製品木型 市立相川郷土博物館には、工作工場群で製作・使用された鑄物用の製品木型が所蔵されています。製品木型は多種にわたり、歯車や鋳車車輪、排水ポンプ部品等があります。



円盤形土製品



レンガ



製品木型

まとめ

今回の発掘調査によって検出した建物基礎と（株）ゴールデン佐渡所蔵「工作工場機械配置図〔昭和17（1942）年〕」（新潟県指定文化財）の建物配置を比較すると、当時の建物基礎が図面どおりに残存していることが判明しました。工作工場群の最終形態はこの頃には整えられていたと考えられ、おもに昭和初期～昭和17年頃までに新設・改築された旧佐渡鋳山工作工場群の施設跡であることがわかりました。（鹿取 渉）

片辺・鹿野浦海岸石切場跡 分布調査

— 江戸時代の鉾山臼用石切場跡 —

所在地	佐渡市戸中・南片辺
調査期間	平成20年10月1日 平成21年9月4日～平成22年3月19日 平成22年6月10日～同6月11日
調査面積	1,000,000m ²

遺跡の概要

遺跡は、相川市街地より北へ約12km、外海府海岸沿いに所在する海岸段丘崖下の鹿野浦海岸^{かのうら}を中心とする海岸部に立地しており、国名勝である「佐渡海府海岸」の範囲に含まれています。

『佐渡年代記』・『佐渡国略記』では慶長年間に播磨国（摂津国カ）見影から「四兵衛」と「源右衛門」の2人が来島し、相川の石切町（現在の下相川）に居住して、元和から寛永（1615～1643）頃、片辺^{かたべ}の鹿野浦で石磨用の石切丁場を開いたとあります。以降、鉾山臼^{したうす}（下磨）の石材供給のため、採石が続けられましたが、相川金銀山の不況とともに生産量も衰え、現在は採石を行っていません。



遺跡遠景（Ⅰ区・北から）

調査の成果

石切場跡は、南片辺～鹿野浦にかけての南北2ヵ所（Ⅰ・Ⅱ区）の海岸線に沿って露出する岩場にあたり、土砂の堆積が無いことから、これらの露岩や岩礁において石材を切り出した痕跡を容易に確認することができました。平成21年度に実施した詳細分布調査では、14ヵ所の採石域、105ヵ所の矢穴・矢穴痕が確認されました。江戸時代の史料によると、ここで切り出された石材は船で下相川に運ばれて鉾山臼（下磨）として加工されたことが書かれています。分布調査では、この記述を裏付けるように海岸で船へ積むために石材を二次加工したと考えられる矢穴を伴う岩塊が複数堆積するエリアを確認しました。



石材の切出しによって垂直となった岩場



石材切出し後に残された矢穴痕



露岩に残された矢穴（一次加工品）



岩礁部の岩場に残された矢穴痕



岩塊に残された矢穴（二次加工品）



佐渡奉行所跡より出土した鉾山臼（下磨）

まとめ

現存する矢穴・矢穴痕の矢穴口長辺を見ると、慶長期のものとされる 15cm 前後のものはほとんど見られず、元和期前後のものと推測される 9～12cm のタイプが一気に増加する傾向が見られ、6～9 cm 前後のタイプがもっとも多くなり、6 cm 未満のタイプは減少する傾向が見られます。これは、元和期に石切場が開かれたとする史料の記述を補完するものであり、金銀山で使用される鉾山臼（下磨）の需要増加に伴い、江戸時代前期から採石が盛んに行われたことが要因と考えられます。

南部（Ⅰ区）の石切場跡では、露出した岩場や岩礁部に矢穴跡が多く見られ、北部に比べて石材を切り出した痕跡が集中して見られる状況にあります。一方北部（Ⅱ区）では、海岸線に矢穴を伴う 60～100cm 前後の岩塊が複数堆積する範囲が多く見られ、岩場から切り出された石材の二次加工が行われた場所であったと推測されます。また、一部では削岩機を用いて採石が行われたと考えられる直径 3 cm 前後の円柱状の溝が認められ、近代まで採石が行われていたことがわかりました。

（宇佐美 亮）

佐渡金山遺跡発掘調査

— 相川四十物町地点の宅地跡 —

所在地 佐渡市相川四十物町 ほか

調査期間 平成21年8月7日～同9月27日

調査面積 54m²

遺跡の概要

佐渡金山遺跡は、北方の間歩分布域や「山の内」と呼ばれる上相川・間ノ山のある初期鉱山集落域から、近世初期に市街地化された「上町」の台地、海岸部の低地に沿って南北に延びる「下町」地域に分布しています。

調査地点は「上町」台地に立地し、東方約150mの所には国史跡「佐渡奉行所跡」が位置しています。調査対象の宅地跡は相川四十物町に所在し、標高は約52mを測ります。個人住宅建設に伴う発掘調査によって、石垣が1基検出され、そこを境として上段と下段に分かれることが判明しました。



調査地点全景（北西から）

調査の成果

確認された遺構としては、上段からは土坑1基・ピット3基・敷石遺構1基、下段からは土坑2基・石敷を伴う溝1条を検出しました。また、3層の火災層を確認し、火災層やその前後の層中から近世陶磁器等の良好な一括資料が出土しました。江戸期の四十物町近辺では、火災は史料に



調査地点北壁土層（火災面）断面（南から）



溝（北から）

見られるだけでも25回発生しており、このうち四十物町全体を襲ったと確実視される大火は正保4(1647)年・寛保2(1742)年・寛延元(1748)年・天保5(1834)年・安政5(1858)年の5回あります。今回の調査で検出した火災層は、その前後の層等の出土遺物を検討した結果、最上部の第1火災層は安政5(1858)年、中層の第2火災層は天保5(1834)年、最下層の第3火災層は正保4(1647)年の火災堆積層と推定されます。



石垣全景（西から）

出土品

近世陶磁器のほか、土器、瓦、石製品（石磨・扣石・間知石・硯）、銭貨があります。陶磁器類は16世紀末・17世紀初頭～幕末期までまんべんなく見られますが、特に17世紀代の資料が多く出土しています。陶磁器類の産地を見ると、肥前・備前・瀬戸・美濃、中国（景德镇・漳州窯）等のものが出土しており、当時から、さまざまな地域のものが相川へ流通していたことがわかりました。



中国漳州窯系磁器 皿



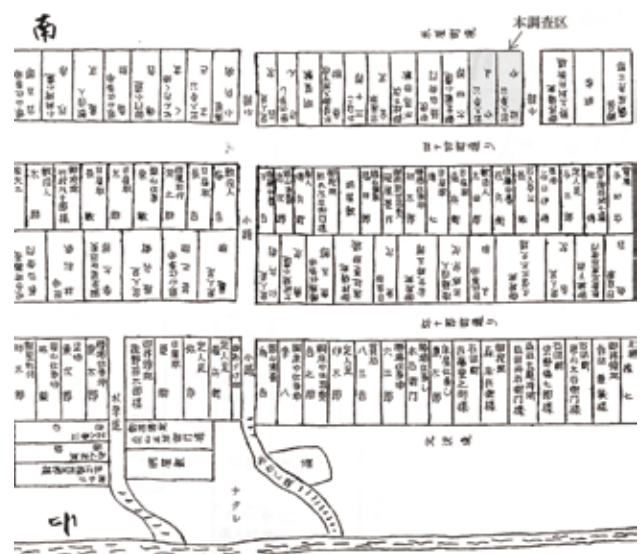
関西系陶器 鉢（被熱あり）

まとめ

第1～3の火災層とその前後の層の出土遺物を検討した結果、最上部の第1火災層は安政5(1858)年、第2火災層は天保5(1834)年、第3火災層は正保4(1647)年の火災堆積層と推定され、石垣は第2火災層直下から検出したもので、19世紀前半以前の所産であることがわかりました。

また石垣は、そこを境として上段と下段に分かれています。文政9(1826)年「相川町 町墨引」を見ると、出入奉公「はや」・「やよ」の敷地と記載されており、上段と下段の境の石垣は、屋敷境を意味していることが明らかとなり、本調査区は元々は2軒分の敷地であったことがわかりました。

（鹿取 渉）



文政9(1826)年「相川町 町墨引」(四十物町 部分)

鶴子銀山代官屋敷跡発掘調査

— 中・近世の銀山代官所跡 —

所在地 佐渡市沢根 ほか

調査期間 平成22年7月1日～平成25年10月31日

調査面積 H22:220㎡、H23:250㎡、H24:206.7㎡

遺跡の概要

鶴子^{つるし}銀山代官屋敷跡（以下代官屋敷跡）は、鶴子銀山跡の南側、しなみ沢左岸の高位段丘上、標高約 110 m 付近に立地する遺跡で、南・東・西側の 3 方向を沢に囲まれ、北側には「鶴子道」と呼ばれるかつての幹線道路が通ります。ここから北側の山中には鶴子銀山の採掘跡が広がり、東側には鶴子荒町遺跡（以下荒町遺跡）と呼ばれるかつての鉱山集落跡が残されています。また、ここより銀山の主要間歩であった鶴子本口間歩や百枚間歩も近い距離にあり、銀山を統括・経営するためには絶好の場所に立地しています。

代官屋敷（陣屋）が建てられた時期については、『佐渡古実略記』に天正 17（1589）年、上杉景勝が外山に陣屋を建てて山口右京を目代（代官）として置いたとあり、この陣屋は天正 17 年以前よりあったと書かれていることから、この陣屋が当該遺跡と推測されています。代官屋敷は、慶長 8（1603）年に佐渡代官の大久保長安の命令により相川に陣屋（後の佐渡奉行所）が移されるまでの間、金銀山を統括するために機能していたと考えられます。慶長 15（1610）年以降、代官所に関わる文献史料が見られなくなることから、遅くとも江戸時代前半には廃絶したと推測されます。



遺跡遠景（北から）



絵図に描かれた陣屋跡・堀跡の表記（赤矢印）

調査の成果

平成 22～24 年度にわたる代官屋敷跡の発掘調査によって、遺跡南部では地表面でテラス形状が確認できる範囲で、中央部のテラス群を囲むように東西に土塁が築かれていることがわかりました。これらのテラスに設定をした 1・2・12・13 トレンチ周辺の最も大きなテラスをはじめとする範囲では、柱穴などの遺構が主体となることから、建物群が存在した管理施設に関係するエリアと考えられます。

遺跡北西部は部分的にテラスが確認できる範囲にあたります。1 トレンチ北端では、直径約 70 センチの方形炉跡 1 基を検出しました。土壌分析の結果、銀・銅・鉛といった金属成分を検出したことから、灰吹法に関係する炉跡と想定されます。また、炉跡周辺の土壌からも鉛が検出されているため、製錬施設に関係す

るエリアと考えられます。

遺跡北部は窪地が多い地域にあたり、場所によって厚さ 50cm 以上の盛土層を確認しました。出土遺物の多くはこの盛土層中から出土したものです。4・8・10 トレンチでは、溝によって連結する長径約 1 m 前後の土坑を複数基検出しました。土坑床面からはズリを含む砂層が堆積しており、鉋石の粉碎や選鉋作業に関わる選鉋施設に関するエリアと考えられます。



9 トレンチ掘立柱建物跡（東から）



東側土塁の土層断面（南東から）



選鉋に使用されたと推測される土坑と扣石（南西から）



1 トレンチ北端で検出された方形炉跡（北西から）

出土品

陶磁器、土器、羽口、石製品（硯・扣石・磨臼）、鉄製品（和釘）、鉋滓等が出土しています。陶磁器類は、肥前系陶器が多く、このほかに肥前系磁器、備前焼、瀬戸美濃焼、中国産磁器（景德鎮窯、漳州窯）が見られ、おおむね 16 世紀末～17 世紀前半に属するものが多いようです。製錬関係では角筒形の羽口が出土したほか、製錬作業の際に生じた鉋滓が出土しました。選鉋関係では、4 トレンチから扣石・磨臼が各 1 点出土したほか、10 トレンチで扣石 1 点が出土しました。

まとめ

トレンチによる発掘調査という限られた調査面積の中ではありますが、検出された遺構によって、代官屋敷南部・北西部・北部で、機能ごとに明確な使い分けがなされていたことが明らかとなりました。また、出土した陶磁器の年代が 16 世紀末～17 世紀半ばにほぼ限定されていることから、鉋山の中心が相川へ移されていく過程の短い期間のみ利用された場所であることがわかりました。（宇佐美 亮）

西三川砂金山跡試掘調査

— 砂金採掘地の1つ五社屋山地区 —

所在地 佐渡市大小 ほか

調査期間 平成23年10月14日～平成26年12月12日

調査面積 22.5㎡

遺跡の概要

西三川砂金山跡は、真野地区の西三川川水系流域に広く展開する砂金山群と、採掘域関連遺構、集落等からなる遺跡で、総面積は約 150 万㎡におよびます。

調査地点は砂金稼ぎの中心的集落である笹川集落にほど近い「五社屋山^{こしややま}」と呼ばれる砂金採掘域の1つです。五社屋山はこれまでの分布調査により、地表面上に砂金流し用の水路跡や、その水を溜めた堤跡等の遺構が良好に確認されています。稼働時期は不詳ですが、18 世紀中頃の文献に「金山之内古稼跡」として登場することから、比較的早くから砂金採掘がされていたことがわかります。

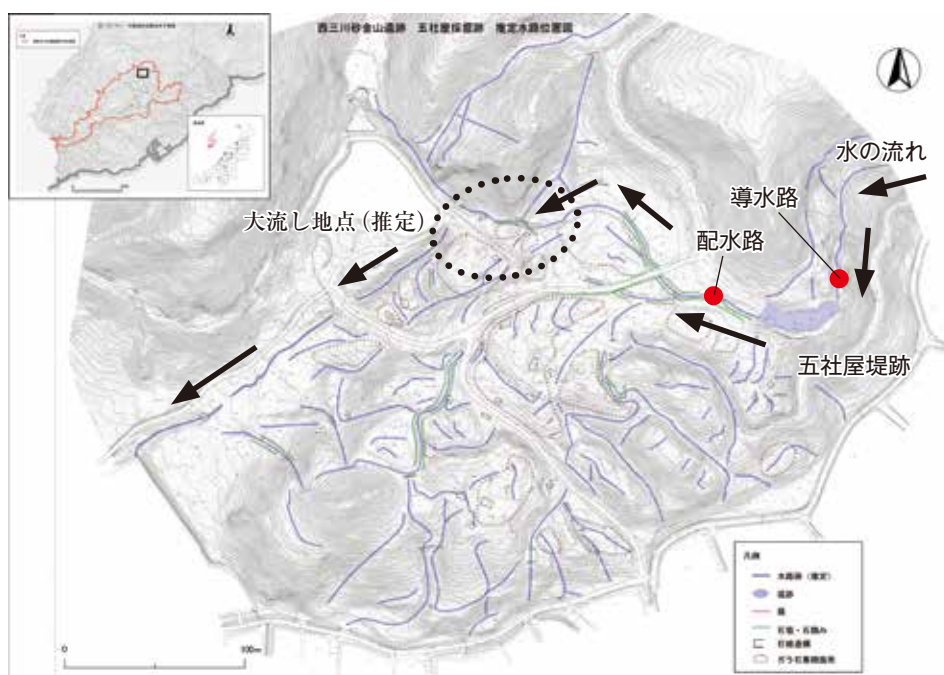


五社屋山の位置（笹川集落から真野湾を望む）

調査の成果

西三川砂金山では、「大流し」という全国でも稀な採掘技術を用いて砂金採取を行っていました。大流しとは、砂金山の山裾を掘り崩し、堤（水溜）にためた水を人工的に引いた水路に勢いよく流し、余分な土石を洗い流すことで渠底に残る砂金を採取する技術のことです。

この伝統的な砂金採取技術の実態解明のため、堤と導・配水路の発掘調査を行いました。



地表に見られる大流しの痕跡（五社屋山地区）

五社屋堤 数々の古絵図に登場する堤で、五社屋山稼ぎの基幹となる堤です。寛保元（1741）年の古文書（「金子勘三郎家文書」）によれば、「長拾五間（約 27 m）、幅八間（約 14.4 m）、深サ五尺（1.5 m）」と記録されています。発掘調査の結果、堤の大きさは、長さ約 29 m、幅 12.7 m 以上、深さ約 1.6 m と古文書の記録とほぼ一致することがわかりました。また、堤の底付近の土壌堆積は、滞水していた時に現れる特徴を示しており、実際にこの堤が水溜として、長きにわたり機能していたことが確認できました。



五社屋堤の現況と調査地点



堤内の堆積状況

導水路・配水路 五社屋堤に水を溜めるためには、約 1.2km 上流の自然河川に堰を設けて分水し、導水路により水を引く必要があります。発掘調査の結果、導水路は幅約 2 m、深さは約 25cm と小規模でしたが、何度か掘り直されていることがわかりました。また、底面には漏水を防ぐための粘土を貼り付ける工夫もされていました。そして、堤に溜めた大流しのための水は配水路により採掘地点まで運ばれます。配水路は、採掘地の移動とともに何度も造り替えられ、現在は放棄されたかつての水路の痕跡があちこちに確認できます。その 1 つを発掘調査したところ、石組みを伴う土塁で護岸を施した水路の痕跡が確認できました。こちらも幅約 2.2 m、深さ約 30cm と小規模ですが、水路は厚さ 2 m もの盛土の上に築かれていました。盛土の中には、時代の異なる複数の水路が埋没していることも判明しました。このことは、砂金を採るために山を切り崩し、不要土を積み上げてはその上に新たな水路を築き、再び違う採掘地点へと移動を繰り返した往時の砂金稼ぎの苦労を思い起こさせます。



五社屋堤への導水路



石組みのある排水路

まとめ

調査の結果、大流しに使用された水路や堤の具体的な規模・構造・埋没過程等が明らかとなりました。このことは、伝統的に用いられてきた砂金採取技術の復元に大きく貢献するものと期待できます。一方、出土品がないことから、遺跡の詳しい年代の検証が今後の課題です。

（相羽 重徳）

鶴子荒町遺跡発掘調査

— 鶴子銀山の鉱山集落跡 —

所在地 佐渡市沢根五十里字牛ヶ首 ほか

調査期間 平成24年5月23日～平成25年10月31日

調査面積 118.5㎡

遺跡の概要

真野湾を望む標高約 90 ～ 130 m の南側斜面丘陵地に立地し、北方には鶴子銀山跡の採掘域が広く展開します。

鶴子荒町遺跡は、安土桃山時代後期に成立したと推測される、鶴子銀山に関する鉱山集落跡です。鶴子銀山代官屋敷跡の東側に隣接することから、銀山経営の拠点として機能したと考えられますが、文献資料が少なく、集落の存続時期や規模等の詳細は不明です。数少ない資料からは、江戸時代初期の相川金銀山の発見・発展と、それ以降の鶴子銀山の鉱石産出量の低下に伴い、相川への移転や集落規模の縮小が始まり、江戸時代後期には集落が廃絶していたことがうかがえます。



調査区遠景（南東から）

調査の成果

分布調査 鶴子荒町遺跡では、現在でも山間部の斜面地に残された大小様々の不整形な造成面を見ることができ、往時の鉱山集落の面影を偲ばせています。それぞれの造成面は、本来の山の地形をうまく利用して造られており、短い小路でつながっています。これら造成された平坦面に、住居や作業場を構え、銀生産を行っていたものと考えられます。山中を歩くと、鉱石クズ（ズリ）の他、日常生活に使用されたと考えられる陶磁器などが散布しています。とりわけ、林道国中北線に面した平坦面からは、銀の製錬の際に排出される製錬カス（鉱滓）や炭化材、送風管（羽口）等が大量に分布していました。このことから、鶴子荒町遺跡は、居住域のみではなく、鉱石の選鉱や銀製錬を行っていた可能性が高まりました。



造成された平坦面



古道「鶴子道」

発掘調査 分布調査で銀製錬に関連する遺物が大量に見つかった地点を対象に、発掘調査を行いました。調査面積は約 80㎡で、調査期間は2ヵ年です。調査の結果、現在見ることのできる平坦面はもとも起伏のある地形を埋め立てて造成されていることがわかりました。造成面上には、製錬炉と考えられる遺構が複数見つかりました。製錬炉は何回か造り替えられており、周囲には鉱滓や炭化材、羽口等が散乱していました。炉の周辺には柱穴列が並ぶことから、上屋が架けられていたのかもしれません。比較的低地には、炭化材や鉱滓が大量に廃棄されており、銀製錬作業場の具体的な土地利用の姿がうかがえます。製錬が行われた時代は、出土遺物の年代観から江戸時代初頭の 1600 年代から 30 年代が中心とみられ、比較的短期間の操業であることがわかりました。



検出した遺構



検出した製錬炉（直径約 80cm）

出土品

1580 年代から 1630 年代頃に生産された陶磁器類が多く出土しました。その中で主なものは、江戸時代初期のやきもので、唐津焼や備前焼等の他、高級品である中国製品の皿も見つかりました。また、銀製錬に関連すると考えられる鉱滓や、羽口も大量に出土しました。これら製錬に関連する遺物は、広大な鶴子荒町遺跡の中でも発掘調査地点に特に集中していることから、この地点で製錬を行っていたことの証といえます。



唐津焼の皿（近世初頭）と水晶



鉱滓（製錬カス）



羽口（送風管）

まとめ

これまで史資料から鶴子銀山の鉱山集落跡としてその存在が知られていたものの、実態が不明であった鶴子荒町遺跡ですが、近年の分布調査や発掘調査を通じて少しずつ全容がわかりはじめてきました。出土品や遺構の特徴と年代は、文献から考えられてきた鉱山集落の変遷を裏付けるものです。（相羽 重徳）

上寺町地区分布調査

— 近世～近代の寺院跡 —

所在地 佐渡市相川次助町45番地 ほか

調査期間 平成24年8月～平成26年1月

調査面積 50,000m²

遺跡の概要

遺跡は大佐渡山脈の南西部、相川湾に注ぐ濁川左岸の標高100～150mの山中に位置します。遺跡の北東には、初期鉱山集落の上相川地区が隣接し、さらに奥には、相川金銀山のシンボルである「道遊の割戸」や近世の採掘跡が分布しています。また、南西方向には海成段丘上に広がる上町地区が展開し、段丘の先端には佐渡奉行所が立地しており、北には明治以降の近代施設（高任・間ノ山地区）が現存しています。

今回の調査によって、江戸時代初期から昭和戦前までの遺構・遺物が検出され、特にテラス状遺構・石垣等の遺構や、墓石等の石造物が地表面において良好に残されていることが判明し、鉱山関係者の信仰対象であった寺院の存在が明らかになりました。



遺跡遠景（南西から）

調査の成果

今回の調査では、テラス83基、墓域8カ所、石垣85基、石段5基、石列7条、道9条、井戸5基、池3基、水路2条が検出されました。

調査は地表面での確認に限定されましたが、寺碑・墓石等の石造物や、石列・井戸・池・水路等の遺構の分布状況から、各寺院の範囲や位置関係の検討を行い、これまで記録等で確認されている8カ寺について、当時の絵図資料とほぼ同一の場所に位置していることが判明しました。



興禅寺（臨済宗）基壇跡

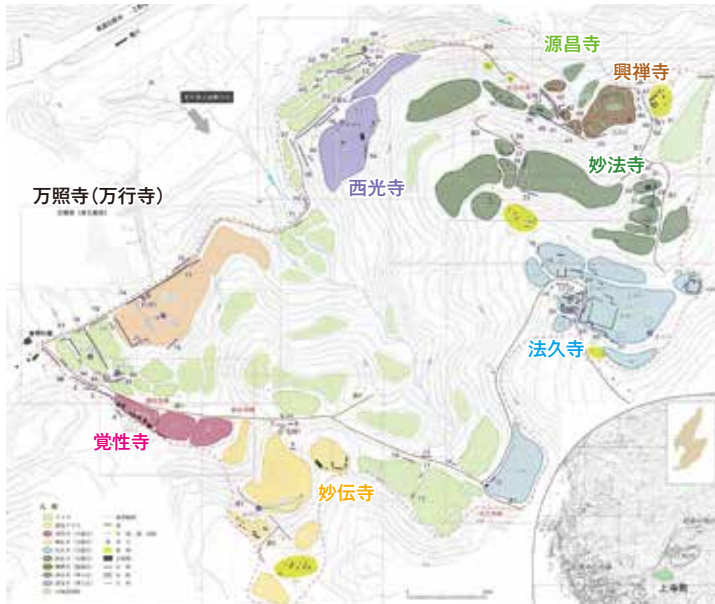


妙法寺（日蓮宗）墓地

寺院以外にも、上寺町周辺には鉱山関係者、地役人、職人等が居住していたことが江戸時代の史料に記されており、それに伴うテラス・石垣群のほか、明治から昭和初期にかけての鉱山労働者の寄宿舍であった大塚部屋の石垣・建物跡・井戸跡・水路跡等も見られます。



大塚部屋跡の石垣



各寺院の分布状況（左：遺構全体図、右：江戸時代の絵図）

出土品

16世紀末から19世紀中葉にかけての土器・陶磁器類56点を表採し、仏花瓶や瓦等、寺院の存在を示す遺物も確認できました。また、墓石・石柱等の石造物は387基にのぼり、その中で、地役人や商人等、記録上に見える人物の墓を特定できたことは、大きな成果であったといえます。



表採した陶磁器・瓦



法久寺（日蓮宗）の松栄氏・佐藤氏墓地

まとめ

上寺町地区は、相川金銀山の成立に伴い数多くの寺院が建立された地域であり、現在も、地表面でテラス・石垣等の遺構や墓石等の石造物が良好に遺存していることに加え、文献資料と比較しながら、当時の鉱山関係者の信仰の一端をうかがい知ることができる重要な遺跡です。

（若林 篤男）

佐渡金山遺跡分布調査

— 中寺町地区の善行寺跡 —

所在地 佐渡市相川中寺町 ほか

調査期間 平成25年8月15日～同9月30日

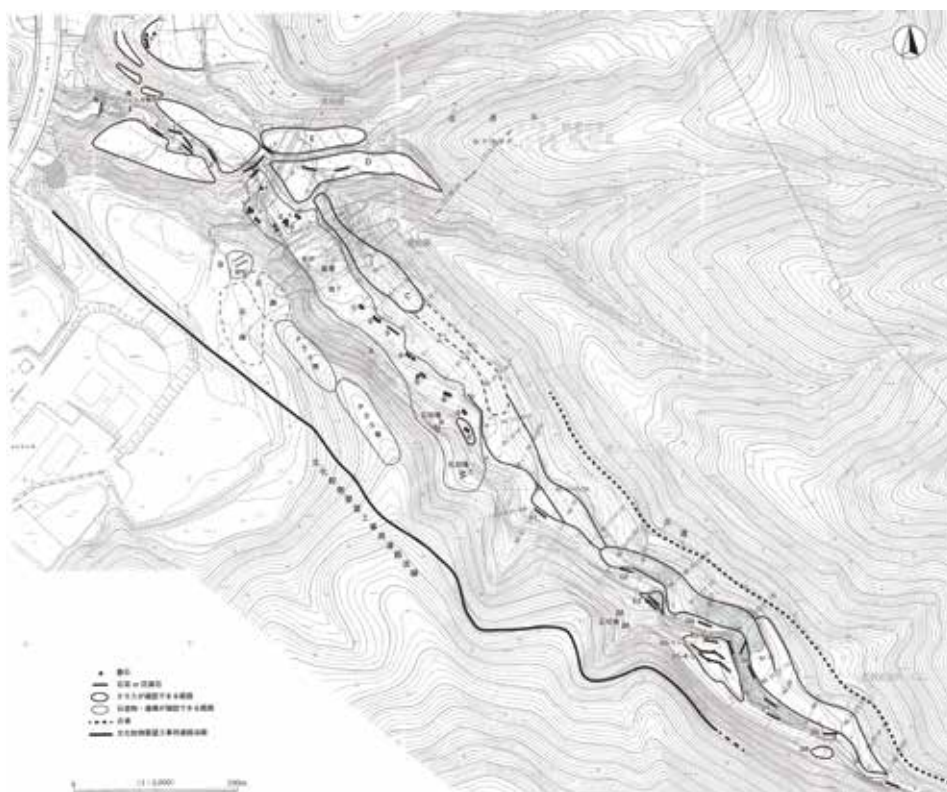
調査面積 4,000㎡

遺跡の概要

佐渡金山遺跡は、北方の間歩分布域や「山の内」と呼ばれる上相川・間ノ山のある初期鉱山集落域から、近世初期～前期にかけて市街地化された「上町」の台地、海岸部の低地に沿って南北に延びる「下町」地域に分布しています。

調査地点は間切川中流域に立地する寺町地域で、調査地点の周辺には現存する長明寺・相運寺・瑞仙寺や、廃寺である法円寺・妙体寺・大超寺といった寺院跡が存在しています。

砂防堰堤工事予定箇所について、分布調査を行った結果、善行寺跡の基壇や井戸・墓地、間切川護岸の石積み、石切場等が見つかりました。



遺構分布図

調査の成果

調査箇所は間切川によって形成された狭小な谷底平野及び斜面部に立地し、文献資料などと照合した結果、寛永5(1628)年、善行坊日達(日進ともあり)によって上相川から移され、明治元(1868)年に廃寺となり、相川次助町の妙法寺に合併された(妙法寺は大正14年に山形県へ移転)善行寺跡と判明しました。ただし、現地で見つけた墓石銘によれば、元禄から明治30年代までの建立年が確認されました。善行寺跡の寺域からは、墓石・基壇・石段・区画溝・井戸・池といった遺構も見つけることができました。

また善行寺跡以外の遺構としては、時期不詳ながら、西側(間切川左岸)には平坦面(テラス)・墓地・石切場が、東側(同右岸)には数段にわたる多数の平坦面と古道なども確認しました。



善行寺跡 全景（北西から）



善行寺跡 基壇入口部分（北西から）



善行寺跡 基壇付近 井戸（北から）



善行寺跡 墓石（南西から）



石切場跡（北から）



石垣（北から）

出土品

近世～近現代の陶磁器類のほか、石製品（墓石・石塔・石磨等）があります。

まとめ

詳細な帰属時期は不明ながら、江戸時代以降の寺院跡・墓地及び人工的に作り出された平坦面（テラス）、石積み・石垣等の遺構が良好に遺存していることが判明しました。国史跡「佐渡金銀山遺跡」に追加指定された寺院跡の上寺町地区と比較しても遜色ない遺構の規模と保存状態であり、将来的な追加指定を目指していく予定です。

（鹿取 渉）

戸地川発電所分布調査

— 大正～昭和時代の佐渡鉱山発電所跡 —

所在地 佐渡市戸中 ほか

調査期間 平成26年4月25日～平成27年1月15日

調査面積 2,000㎡

遺跡の概要

戸地川流域に建設された戸地川第二発電所は、相川市街地より約9km北方にある戸地川右岸に立地します。

戸地川第二発電所は、戸地川の豊富な水量を利用し、明治～大正時代に増大しつつあった佐渡鉱山の電力需要を満たすために建設された発電所の1つとして、大正6～7（1917～1918）年に建設工事に着手し、大正8（1919）年より稼働を始めました。発電所にはリアクションタービンと510kVAの発電機が設置され、以後、昭和52（1977）年に施設が閉鎖されるまでの間、佐渡鉱山へ電力を供給しました。



遺跡遠景（北から）

調査の成果

戸地川第二発電所の調査については、平成15年度に現存する発電所建屋の建造物調査が行われ、建物や機械類等の調査が行われています。今回、調査対象とした範囲は、第二発電所の建物を除く、水力発電システムの一部である上流部の取水口や導水路、水槽、水圧管路等の建造物や構造物です。これらの遺存状況を調べるため、対象となる約2kmの区間を調査範囲としました。また、併せて現存する鉱山図面類や古写真等の資料調査を実施しました。今回実施した調査は、遺跡と記録類の両面から調査を実施することで、戸地川第二発電所全体の歴史的価値を明らかにすることを目的としています。

分布調査の結果、第二発電所の取水口、取水口から発電所崖上の水槽へ向かう導水路、発電所に水を落とす貯水槽をもつ水槽、余剰の水を排水するための余水路、排水路等の遺構を確認しました。



戸地川第二発電所の取水口（南から）



余水路の石積み水路（西から）



戸地川第二発電所（南から）



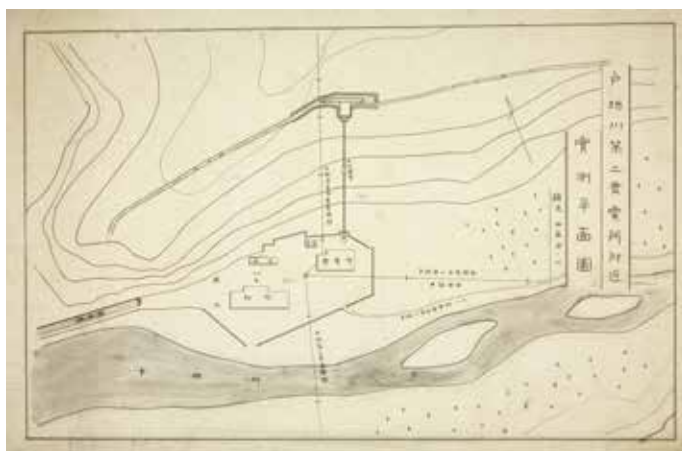
戸地川第二発電所内の機械類

記録類の調査

戸地川第二発電所は、施設や設備等を描く様々な図面類が残されています。(株)ゴールデン佐渡や相川郷土博物館で所蔵するこれらの鉱山図面類の調査を併せて行ったところ、戸地川第二発電所に関するものは図面類 54 点・古写真 2 点でした。今回、分布調査を実施するにあたり、施設の配置状況を示す図面の存在は、事前情報として大変役に立つものでした。このような図面類が多く残されてきた要因として、施設の建設や改修・修理の際に、これらの図面を作成・使用していたこと、鉱山の休山後もこれらの資料が大切に保管されてきたことに起因しているようです。



古写真：戸地川第二発電所遠景



図面：戸地川第二発電所附近 実測平面図

まとめ

戸地川第二発電所は、昭和 52 年に施設が閉鎖された後、発電所建物を除く水力発電システムの全容とそれに関わる遺構が現在どの程度残されているのか明らかにされていませんでした。今回の分布調査を通して、第二発電所の水力発電システムの全容を示す遺構の分布状況の調査が進められたことで、佐渡鉱山における電力供給の様相の一端が明らかになりつつあります。

（宇佐美 亮）

上相川地区分布調査

— 相川金銀山の初期鉱山集落跡 —

所在地 佐渡市上相川町 ほか

調査期間 平成27年4月9日～平成28年3月31日

調査面積 近世 10,000㎡(測量 2,600㎡)

遺跡の概要

佐渡市では、上相川地区において、平成17年から18年度にかけて34,900㎡、平成27年度に10,000㎡の詳細分布調査を行いました。しかし、これまで調査の及んだ面積は上相川遺跡全体のまだ4分の1にも満たないものです。

平成27年度には、主に「外記町」と「床屋町」と伝わる地点を調査しました。外記町は、山師の江戸外記が居住したといわれ、床屋町は製錬所が置かれた場所と推測されています。床屋町では各間歩から出た鉱石を試し吹きして品位を定め、それを表示してせり場で入札して製錬業者が買い取っていったものと推定されます。

分布調査の結果、絵図に見られるような古道や屋敷割りの跡が良好な状態で残されていることが確認できました。

また、現地には江戸時代の陶磁器の他、鉱山臼や鉱滓（製錬の時に排出されるカス）などが多数散布しており、文献や絵図から推測される土地利用や稼働時期と一致しています。



屋敷割り（テラス）



古道と屋敷境の石垣



「上相川絵図」＜宝暦2年（1752）作成、文化9年（1812）複製＞（佐渡市蔵）

また、上相川地区にはいくつかの寺院があったことが知られています。床屋町の南側丘陵部には慶長元（1596）年の創建と伝えられる浄土宗光明山専念寺跡があります。境内地跡には、現在でも石塔や基壇等が残され、往時を偲ばせます。分布調査では、専念寺へ上るための石段が確認できました。

今回の調査では井戸が5基確認できました。中には石組みの立派なしつらえのものもあります。今のところ、井戸は今回調査の範囲でのみ発見されていますが、その理由はわかっていません。



専念寺へ上る石段



見つかった石組み井戸

出土品

調査地点の全域で、地表面から江戸時代の陶磁器類が多く採集できました。陶磁器は、唐津焼や伊万里焼が最も多く、器種は、碗、皿、壺類、すりばちなど日常の生活道具が大半を占めています。その他、照明のための灯明皿なども採集されています。江戸時代の初期から幕末までに各地で生産された様々なやきものが採集されていますが、中世に生産されたものは含まれていません。このことは、文献から知られる遺跡の成立年代を裏付けるものと考えられます。また、鉾山臼や製錬関連遺物なども多数採集されており、鉾山集落としての性格を示しているものと考えられます。



鉾石を砕く石臼（叩石）



伊万里（波佐見）焼の碗



鉾滓（製錬カス）



叩石と回転臼（上臼）

まとめ

長きにわたり山間部にひっそりと眠っていた上相川地区ですが、数回の分布調査を経て鉾山集落としての様子が少しずつわかりはじめてきています。しかし、詳しい調査の及んでいないエリアもまだまだ残されていることから、未だ多くの謎に包まれています。また、遺跡の理解と適切な保護のためには、発掘調査が欠かせないことから、今後計画的な調査を行っていきます。

（相羽 重徳）

西三川砂金山跡発掘調査

— 砂金山の集落（笹川地区） —

所在地 佐渡市西三川 ほか

調査期間 平成28年4月18日～同12月16日

調査面積 近世 336㎡（一部、2層調査）

遺跡の概要

西三川砂金山跡は、真野地区の西三川川水系流域に広く展開する砂金山群と、採掘域関連遺構、集落などからなる遺跡で、総面積は約150万㎡に及びます。

遺跡内の笹川地区は、砂金採掘に携わった人々が集まり、集落が形成されたと考えられています。地区内には金山役宅跡や金子勘三郎家（重世話煎）、大山祇神社等の鉱山関連施設（跡地）のほか、立残山や立残堤、金山江等の砂金採取に伴う痕跡が至るところに残っています。調査は、笹川集落内の金子勘三郎家に隣接する336㎡を対象として発掘調査を行いました。



調査地点（上空から）

調査の成果

調査地点の全面に、江戸時代の遺跡が展開していることが確認できました。

遺跡は上・下層の異なる2つの時代の遺跡が累積していました。下層は、地下約30cmの深さから、水路跡や柱穴が見つかりました。水路は五社屋山など採掘域で見つかっている砂金採掘のための水路と特徴が大変良く似ています。下層は、出土遺物の年代から江戸時代前期の遺跡と考えています。上層は、地下約10cmの深さから、江戸時代中期以降と考えられる建物跡2棟や溝、土坑など多くの遺構が見つかりました。これら遺構が見つかった基盤層は厚さ20cm程の造成土で覆われており、造成土の中からは18世紀頃の陶磁器が多く出土しました。この頃、下層の水路などを埋め立てて造成されたものと考えられます。



上層で検出された江戸時代の遺構



堆積状況

水路は、下層から2本を確認しました。部分的な調査のため、全長や幅などは不明ですが、どちらも深さが50cm、幅は2mを超えるもので、中にはガラ石と呼ばれる砂金山に含まれる不要な大型の礫が投げ込まれています。

柱穴には、様々なタイプがあります。穴の断面を観察したところ、下層で見つかった柱穴は、柱の根元を直接地面に埋めて固定する掘立柱建物と呼ばれるタイプの柱穴であることがわかりました。柱穴の上面には円形に礫が並べあり、柱の根固めに使われたのかもしれませんが。残念ながら、部分的な調査のため、どのような大きさの建物があつたのかは不明です。一方、上層の柱穴は、根固めに大型の礫を使用したり、小礫を柱穴に詰め込んでいることが多く、礎石建物であつた可能性が高まっています。

このような建物の建築方法の違いは、土地利用の違いや時代の特徴を示している可能性が考えられます。



礫が入った水路跡



下層で見つかった柱穴跡

出土遺物

調査地点からは多くの遺物が出土しましたが、そのほとんどが江戸時代に焼かれた陶磁器です。碗や皿、すりばちなど、日常の生活に使われた道具が出土したことから、当時の笹川集落での暮らしぶりがうかがえる資料が得られました。陶磁器の産地を調べると、唐津焼や伊万里焼、信楽焼等北前船で運ばれてきたと考えられるものが多く、当時のモノの動きがよくわかります。また、江戸後期には佐渡産のすりばち等も使われていました。その他、銅銭や鉄鍋、西三川地区の特産であつた紫石英等も出土しました。

出土遺物でもっとも古い陶磁器は、1590～1610年代に焼かれた唐津焼です。集落内の大山祇神社は文禄2（1593）年の創建と伝えられることから、集落の成り立ちを考える上で大変重要です。



出土した江戸時代の陶磁器



伊万里焼の出土状況

まとめ

西三川砂金山跡では今回が初めての本格的な集落遺跡の発掘調査となりました。調査の結果、江戸時代前期に砂金採取が行われた後、土地が造成されて現在につながる集落域へと変貌を遂げたことが推定されます。また、豊富な出土遺物からは、当時の暮らしぶりをうかがい知ることができます。（相羽 重徳）

佐渡金銀山発掘調査報告集

発行日／平成29年2月24日

発行・編集／佐渡市 世界遺産推進課

〒952-1209 新潟県佐渡市千種246番地1

TEL：0259-63-5136 FAX：0259-63-6130

E-mail k-goldmine@city.sado.niigata.jp

URL <http://www.city.sado.niigata.jp/mine/>

印刷／新穂印刷

平成28年度文化庁 地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業



平成28年度文化庁 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業